

月葬

新開拓海

「退屈しのぎに陶芸でも始めてみようかと思うんだけど・・・どうだろうか、な
んでも秩父の山の中に工房があってそこに大きな窯があるんだぞっだ。毎週土
曜日そこで講習会を開くというんだが・・・」

私は妻の良江の反応を確かめるように新聞をそっと下げた。良江はホームヘル
パーの来訪日を確認しているらしく、カレンダーの上を指でなぞっている。

「四月は研修生が来ることになっているわ、もちろんいつものヘルパーさんも同
伴だけど・・・」

「研修生が来れば何かと気を使っけど仕方ないだろうね。それよりもリハビリを
兼ねて陶芸をやってみようとおもっただが・・・どうだろうか」

「何よ急に・・・それに七十よ・・・山なんか登れるの・・・」

「三峰口の駅からマイクロバスで送迎してくれるから心配ないよ。それに施設から
ヘルパーさんが介添えでついて来るっていうし・・・毎日デイサービスと家の
往復だけじゃ退屈で気が滅入っちゃってね」

「あなたの好きなようになさったら・・・」

良江は陶芸には興味が無いらしく、籐椅子に腰を下ろすといつものようにタマ
を膝の上に抱き上げた。猫の体が軟体動物のようにしなやかに伸び、良江の膝の
上いっぱい横になった。

「さあ、綺麗にしましょうね・・・」

「そんなに毛づくろいばかりしていると今に丸はげになっちまっぞ」

私は新聞を畳むとテーブルの横のマガジンラックに差し込んだ。

「こうしているとなんか落ち着くのよ・・・タマにはすまないけど気分が沈んでいる
ときはこれがなによりの薬みたい」

ひどい躁鬱症の良江にはタマを相手にしている時が一番落ち着くようだ。

「それでいつからはじめるの・・・」

「なにを・・・」

「嫌だわ、今陶芸をはじめるとおっしゃったじゃないの・・・それでいつからなの・・・」

「四月の第一土曜日からだ」

「おにぎりかなんか持っていくの・・・」

「むこうでみんな一緒に食事をするらしい、講習料の中に昼食代、送迎代含むと書いてあったよ」

「それじゃ、楽でいいわ知っている人はいらして・・・」

「ディサービスの佐々木さんが世話役なんだ。それに施設の仲間も一緒だよ・・・」

私は右手で足の指に鼻緒を突っ掛けると下駄の先を敷石に打ちつけ、ゆっくり立ち上がってから庭に出た。

体の左半分が麻痺して、はじめは杖がないと歩行するのが難しかったが、今ではそれほど不自由さを感じていない。倒れたときには随分と良江にあたってものだが、不自由なりに体を動かすコツのようなものをつかんでからは、近くの公園ぐらいなら一人で散歩できるまでに回復していた。良江はいつも心配して散歩の度に車椅子を用意するが、足が弱くなるようでもうひとつ馴染めなかった。

私は庭の隅に置いてある車椅子のカバーを取ると久しぶりに座席シートを広げて腰を下してみた。

「冬の間手入れしていなかったから随分と草が生えたよ」

私は車椅子から体を折るようにして、玄関に通じる飛び石の縁にびっしりと生えているつめ草を薙り取った。土が柔らかいのでつめ草は簡単に抜けた。私はしばらく錢苔やつめ草取りに熱中した。錢苔はジグソーパズルのようにきれいに剥がれた。陽気に誘われたのか裏庭の藪椿のあたりからつぐいすの鳴き声が聞こえてくる。

「あら、初音だわね・・・」

良江が耳に手をあてた。

「わが家につぐいすが来るくらいじゃ、公園にはヒワやセキレイが遊びにきているかもしれないぞ・・・ちょっと散歩してくるかな・・・」

「まだ風が冷たいんじゃない・・・」

良江は洋服ダンスを開けると中からコートを取り出した。防臭剤の臭いが庭まで広がってきた。タマが椅子から飛び降りた。籐椅子が振子のように揺れている。

私はコートを羽織ると戸を開けて外に出た。

「早く帰ってくるんでしょ、いつまでも風にあたっていちゃ体にさわるわよ」

良江は子供を叱るように強い口調できっぱり云つとまたタマを捕まえて毛をづくろいをはじめた。

あれじゃ、良江が死ぬ前にタマのほつが赤裸にされちまうな

ほんやりそんなことを考えながら団地の中を抜け、五重の塔が見える切り通しをゆっくりと歩いた。孟宗竹の藪の中に斜めに光が射しこみ、花をつけはじめたかたばみやはこべが風に揺れている。

公園は冬ごもりから覚醒した草木や鳥の鳴き声で生き生きとしていた。

私は茶店風の軽食屋に入ると甘酒を注文した。脳梗塞で倒れてから酒も煙草もドクターストップになっていたのて内緒でひとりこっそりと甘酒をのむのが楽しみのひとつになっている。

「おひさしぶりです」

声を掛けてきたのはディサービスで知り合った桑山さんだった。重度のリウマチのため一人で歩けないのでたまに車椅子を使って外出している。この日も同居している長男の連れ合い、厚子さんの手を借りて公園に来たのだという。

「岡田さんもお散歩……」

「ええ、たまに外の空気を吸いたくて……それに家内に内緒でここの甘酒を飲むのが楽しみです」

「あたしもここの甘酒が好きで……それで無理いつて連れてきてもらったんですのよ」

「おばあちゃんは大の甘党だから……」

厚子さんは車椅子のポケットから毛糸の肩掛けを取り出すと桑山さんの首に巻きつけた。

「この人が大切にしてくれるので……いつもすまないと思っているのだけど……なかなかお迎えが来なくて」

桑山さんはすまなそうに皺だらけの手を見詰めた。

「いやですわ……まだまだ元気でいてくださらないと」

「そうですね、やさしいお嫁さんにかわいなお孫さん、うんと甘えて長生えしたほつがいいですよ」

「岡田さん、お孫さんは」

「……交通事故で」くくしましてね。それからは家内と二人つきりです……」

「……そうですね、それは淋しいでしょうね」

「ごめんなさいね。おばあちゃんが変わること聞いて……」

私は冷たくなった甘酒を飲んだ。

「そうそう、やすらぎサービスの人たち陶芸をはじめのんでって、岡田さんも誘われました」

「ええ、折角のお誘いだから始めることにしました……それに指を動かすのは健康にもいいと医者もすすめるし」

「あたしもやることにしたの……これでも昔女学校の頃絵が好きでよく画廊なんかに行きましのよ……」

桑山さんは恥ずかしそうに笑って甘酒の入った湯のみを掌で包み込むようにして啜った。

「風が冷たくなってきたわ、おばあちゃん、もうそろそろ帰らないと……」

厚子さんは車椅子の上の毛布を桑山さんの足に掛けた。

「そろそろ桜が咲きますわね……あたし、西行法師の歌のように桜の咲く頃、望月の夜に……そり死んでしまいたいなって思うの、それにしてもあと何度桜が見られるかしら」

桑山さんはこぶで膨らんだ腕を擦るとヨシズ越しに枝を伸ばしている桜を見上げた。眠っているような目じりがうっすらと光っていた。私は桑山さんの言葉を心の中で反芻していた。

公園の棧道のまわりには青々とした草が生え、等間隔に植えられた桜の木は蕾をつけている。風は冷たかったが、刺すような感じではなく春の兆しを感じさせるそんな風が変わっていた。私は桑山さんの後ろ姿を見詰めながら残っている甘酒を一息に飲んだ。すっかり人気の無くなった公園の林のあたりが月白で薄っすらと明るくなっている。

私の性分に合ったものが、陶芸はなかなか面白かった。講習の初日、特別講師の原賢陽「この人はプロの陶芸家でなんでも飯能焼きの復活に生涯を賭けているといふ見るからに芸術家の匂いのする人で、蓬髪をこよりで結び、甚平の上にヤッケを羽織ったところなど仙人のようで好感が持てた。

原さんは私たち受講者を工房の前の空き地に連れてゆくと

「陶芸はなんといつても土との出会い、これにつきます。良い土が無ければいい焼き物はできません」

そういつて足元の土の塊を手を取った。

「これはただの土の塊に見えるけど・・・よく見てください。秩父あたりにも結構いい土があります。これは御影石が風化したものです。御影石は長石と珪石と雲母からできているんですが、こういう土に出会うまで結構時間がかかる。そうみなさんが最愛のかみさんと出会うまで時間がかかったように・・・」

原さんの絶妙な話し振りにそれまで緊張気味だった空気が和らぐ。私は胸のポケットから手帳を取り出した。

「なんでも書いておいたほうがいいですよ。ちょっとしたことが大切なんですから」

会を主催している秩父陶芸教室の名倉さんが皆の後で笑っている。

原さんはひとくさり土について語るとバケツに土を入れた。

「みなさんの教材です」

桑山さんが車椅子から乗り出すようにしてバケツの中を覗いている。

「こんななんの変哲もない土から九谷とか伊万里とか焼き物ができるんですね」

「焼き物は一に焼き、二に土、三に細工といわれています。みなさんはアマチユアですから土ばかり探していると飽きちゃうでしょう、なるべく早く細工の方に取り掛かるようにしましょう」

原さんの言葉に皆歓声をあげた。

私たちは講習会の内容に満足した。

駅に着いたときには七時をすこし回っていた。なんとなくこのまま別れるのが惜しくて、初日ということもあり駅前の喫茶店に入ってコーヒーで乾杯した。

「初日には欠席者もなく上々の滑り出しだったね」

佐々木さんが満足そうに笑う。

それにしても随分と大きな窯だったこと」

桑山さんが介助のために同行していた厚子さんのグラスにビールを注ぐ。

「よかったじゃないの・・・みなさんと一緒にできて・・・」

厚子さんはグラスを掲げ乾杯の仕草をした。

「もつと簡単なものかと思っただけと意外に手がかかるんだな」

デザイナーの古株太田さんが眼鏡を下げると駅の方に目を向けた。

「もつそろそろヘルパーさんが迎えにくるんだが・・・」

やはり軽い脳梗塞でリハビリ中の太田さんはヘルパーの介添えで家に帰るとい
う。

施設には軽度の障害者から桑山さんのように車椅子を必要とする障害者、家で
面倒をみてもらず捨猫のような境遇を憤りつつも仕方なくここに通ってくる者、
さまざまな事情を持った人たちが送迎バスで通ってくる。その中でボスになるの
は軽度の障害者でしかも介助員の手伝いのできるような者に限られている。ここ
では佐々木さんと講師がわりに大正琴を教えている倉本さんが女性のボスである。
ゲートボール派は佐々木さんのグループにも倉本さんのグループにも入らずいつ
も部屋の隅で雑談をしている。私は誰とでも話すようにしているがそれが佐々木
さんには面白くないようで、たまに「岡田さんは八方美人だね」なんて嫌味を云
われる。

施設は老人特有の臭みで溢れてていた。それでもここに来るのは行き場の無い
障害者か、それでなければ懸命にリハビリに励んで普通の生活を取り戻したいと
思っている者か、いずれにしても家族に迷惑をかけたくない者か、迷惑を感じて
いたたまれなくなった者か、どちらかだ。

「態のいい姥捨て山さ・・・」

佐々木さんは軽い脳梗塞で倒れてからデイサービスに通うようになった。団地
に長男夫婦と住んでいるが連れ合いを亡くしてから家族との間がすっかりいつて
いないのだという。

「家にも長男の嫁がなにか、よそよそしくて・・・食い物といえはいつも
肉ばかりだ。たまには鰯の焼いたのなんか食いたいよ。このあいだなんか、イカ
の焼いたものなんか出してきて『肉ばかりじゃ飽きちゃっうでしょ』って云うんだ。
おれが上手く噛み切れないの知っていてわざと出すんだよ。ここの昼飯のほうが
よっぽどいいよ」

「どこでも年寄りには邪険にされているらしいよ」

私は「家にいるより安心だから」と云われて体よく老人ホームに追いやられた
友人の言葉を思い出した。

「つまるどころ我々は家族のお荷物なのさ、いや、若しかすると日本国の厄介
者なのかもしれないな、こつしてお迎えを待つしかないんだもの」

佐々木さんは皮肉そうな笑いを浮かべた。

「明日は秩父ゆきだ。原さん、轆轤まわしを教えるといっていたけど難しそうで

すな………」

私は話が辛気臭くなつてゆくのが嫌で話題を変えた。佐々木さんの表情が少し明るくなった。

「轆轤を回せれば一人前さ。岡田さんは器用そうだから直ぐのみ込めるよ………」

「いや、テレビで見たけど随分と難しかしそつだったよ」

「そりゃそうだけど……なにこつとも挑戦さ」

佐々木さんは轆轤を引く真似をすると闊達に笑つた。奥歯が見えるほど豪快な笑いに、困窘をしていた太田さんや将棋を指していたゲートボールの世話役石田さんがびつくりして私たちの方を振り向いた。

公園の桜が散り、南京すだれのような枝の先に緑葉がつき始めた頃私たちは二回目の陶芸教室を受講した。前回のように橋立寺にお参りして、工房の教室で写経し、精進料理を食べてから轆轤引きの講習に入った。

「轆轤といつと皆さんは手で回すと思つてしょうが本当は体全身を使って回すんです。手回しの轆轤の方が、味わい深いものが出来るんですが、ここでは電動の轆轤を使います。今日は初日ですので簡単な湯呑みを作ってみましょうか、なに、形なんてどうでもいいんです」

原さんは轆轤の傍らに立つと土をこねはじめた。

「前回云いましたが、こつしてよく土をこねてやるのが大切なんです」

「こねるとこつになるんですか」

「前にも云つたように土の中に入っている空気を押しだしてやるんですわ」

桑山さんはうんうんと何度も頷いた。

土もみが終わると原さんは轆轤を回し始める。

「僕は電動のものは嫌いでね、こつして手で回す感触が好きなんです。皆さんには十分な時間がありません。いやあ、これは失礼……失言です。でも何十年という年月があるわけじゃあない。これは真実ですよ。だから早く陶芸の楽しさを知ってもらいたい。そのためには早く作品を作ることですよ、そしてご自分の陶印を押す」

陶印は造つた焼き物に自分の号を押す印で落款のようなものである。原さんは皆の気分を盛り上げておいて

「では順番に轆轤を引いてもらいましょつか」

土の塊を轆轤の上にのせた。

「僕が見ているとやりにくいでしょう。うから三十分くらいみんな自由になつてみてください」

原さんは「サインをおくると工房から出ていった

「レディファーストとゆきますか」

佐々木さんが俳句グループのまとめ役木村さんの背中を指先で押した。

佐々木さんは木村さんに好意を持っていて、ここへきてからも、なにかと世話をやいている。それが傍目でも分かるほど露骨なのだが、それを非難したり僻んだりする感情は私たち老人には残っていない。一度だけ、施設内で木村さんに筆使いを教えていた後藤さんを押しつけて

「ぼくが教えてあげるよ……」

佐々木さんが割り込んだことがあった。元船乗りだったという後藤さんはいきなり佐々木さんの腕を掴むと

「でしゃばるんじゃないよ」

佐々木さんの頬を平手で叩いた。

佐々木さんも木村さんの手前負けるわけにはゆかない。筆で後藤さんの顔に×印をつけた。

「なにも殴ることはないだろう」

佐々木さんは顔を紅潮させ唇を震わせた。

後藤さんはタオルで墨を拭き取った。

後藤さんは軽い認知障害なのだが骨格の標本みたいに細い体のわりには腕力に自信があり、所内では隠れボスのひとりといわれている。その後藤さんと佐々木さんの思いがけないいさかいに、木村さんは気まずそうに下を向いてしまった。

それ以来、木村さんをめぐる佐々木さんと後藤さんの恋の攻防戦は続いている。夫を亡くし、ほどほど金もあり、瀟洒な家に一人暮らし、髪は真っ白だがそれが上品で、竹久夢二の「美人画」のような憂いを含んだ目には、誰もがどきりとさせられる。木村さんは凜とした後藤さんが好みらしいのだが、佐々木さんはそんなことには頓着せず、木村さんから離れない。秩父に来てからはそれが露骨になっていたことに皆はシラケきっていた。

「轆轤はそう難しいものじゃないよ」

佐々木さんはそんなことにはお構いなく木村さんの後から懇切丁寧に轆轤引きを教えはじめた。

「佐々木さんすこし遠慮したらどうなの」

俳句仲間の加藤さんが怒ったような口ぶりでしたしなめると後藤さんに同意を求めようと首を縦に振った。

厚子さんが下を向いて笑っている。

桑山さんはすっかり轆轤引きに熱中している。

ちよっとしたハプニングがあったが、皆、無事に轆轤引きを終わった。

「あと二回くらいは轆轤引きをやりましょ」

原さんは不整形の湯呑みや花瓶を見ながら工房の掃除をはじめた。武甲山から吹き降ろす風が、ここにはじめて来たときよりいくぶん暖かくなっている。峠道から茜の空に薄月が見え山際が赤く染まっている。私たちは送迎バスに乗り込むとまだ春の陽の温かさが残っている秩父を後にした。

轆轤引きを卒業した頃にはみな形の整った花瓶や湯呑みを造れるほどまで上達した。作品を轆轤から切り離すシッピキには苦心したが、それもどつやら会得した。

「あとは絵付けと焼きですが、絵付けの方は皆さん好きなものをスケッチしてそれを壺に描いてもいいし、適当な図柄にしてもいいんですよ。絵付けのコツは筆をあまり作品に触れさせず、そお、すつと撫でるように描くことです。あんまり強く描くとあとで変なものになってしまうんでね」

原さんは壺に筆を走らせた。

「皆さんは絵描きじゃないんだから上手くなくてもいいよ。家族の方の思い出に残る・・・そんなものを描いてみてくださいね」

私たちは自分の作品に絵付けをはじめた。

「岡田さんは椿の花が好きでしたわね。お描きになるの」

「紙に描くようにはいきませんわ、花の輪郭だけにしようと思っています。桑山

さんは・・・」

私は眼鏡を外した。

「あたしは月と桜の花を描いてみたい・・・」

「おばあちゃんは月の光にひっそり咲く夜桜が好きですものね」

厚子さんが顔料の入ったコップに絵筆を入れる。

「ピンクはなかなかでないよ・・・」

佐々木さんがコンテで壺に雲の図柄を入れている。

「行雲流水ってねこの壺にびったりの図柄だよ……」

原さんが釉薬の入った乳鉢を並べる。

「色は無数にありますが見映えしない壺ですから、あまり淋しい色より明るい色の方がいいでしょう」

乳鉢の中に緑青、ちくちく石、紅殻、広見石を砕いてさらに白でひき潰し泥や灰を混ぜたものが入っている。

「みなさんの作品をこの釉薬にかける、柄杓でかけるのがかけ薬どっぷり漬け込んで引き出すのがずぶ掛け、皆さんの場合はやはりずぶ掛けのほうがいいでしょう」

原さんは釉薬を机の上に置いた。窓から梅雨寒を感じさせる湿った風が入ってくる。

「夏からは順番で作品を焼いてゆきましよう……」

その日は下絵を決め釉薬の講義で終わった。

紫陽花の花が錆び色に変わる頃、やすらぎディスプレイサービスの中は夏の装いに変わった。カーテンは涼しげな青の水玉模様のものに、テーブルクロスも白地のものに変えられ、玄関にはアジアンタムやポトスのような観葉植物が並べられた。

所内は相変わらず囲碁や将棋を楽しむ人、大正琴を弾く人、ハリハリに励む人、昼食が用意されるまで皆好きなように時間をつぶす。

「そういえばこのころ桑山さんの姿が見えないけど……どこか悪くしているのかしら。岡田さんなにか聞いていない」

木村さんがパッチワークの手を止める。

「具合が悪そうにはみえなかったけど……あとは窯入れするだけなのにね……」

私は暑いので外出を控えているのだと思った。

七月の講習で私たちは自分の壺に絵付けをした。

原さんはそれぞれ好みの釉薬を訊くと壺に色合いを書いていった。桑山さんの壺には原さんが絵付けをした。月と桜の下絵に原さんは織部の緑を使って美しく仕上げいいった。

「桑山さん、本当にどうしたのかしらね」

木村さんが絵筆の水を布で拭き取っている。

「そのうちまた来るよ」

佐々木さんはそう云つと新聞を畳んだ。

「またイラクでアメリカ兵が殺されたよ・・・」

「まったく恐い世の中になつたもんですな」

私たち老人は感性が鈍くなっているのか、世界の情勢にはあまり関心を払わない。戦中派と呼ばれ、そこそこ安楽に暮らしてきたが、その反動なのか、老後はひどくみじめで金が無く、寄る辺の無い者は青テント村に潜り込むか、公共の特別養護センターに引き取ってもらつしかない。金のある者は年金と貯蓄した金で瀟洒な老人ホームに入所しそこで死を迎える。貧富の差はあつても、「いかに死にきるか」ということで皆精一杯なのだ。イラクがどうなるうと、アフガンが復興しよう、流れてゆく時勢としか感じない。

「なにか世界の末路を感じますな」

「岡田さんもそう思いますか・・・」

「年金制度が崩壊し、われわれの積み立てた金は取り崩され、なんとか最低生活だけは保証されている。まあ、それだけでも幸せと思わなければやりきれませんな・・・」

「それにしても昨今の葬儀は金が掛かりすぎます、太田さんの奥さんが亡くなつたときなんか、勝手にどんどん進められて気がついたら二百万近くなつていたとか。これじゃ、うっかり死ぬこともできません・・・」

私は頷くとアコーデオンドアを開けて食堂を覗いた。

「岡田さんもつちよつと待っていてくださいな」

ヘルパーが机の上にプラスチックの皿とカップを並べている。ピンクのトレイに整然と並べられた食器にはそれぞれ名前が書いてあり、スプーンと箸が置かれ、薬を服用している人には赤いカップが別に用意されている。大皿にはサラダと細かくカットされた魚の照り焼き、カップにはわかめスープ、それにデザートとしてヨーグルトがついている。ここではパンの好きな人は調理室からパンを貰い、ご飯が食べたい人はヘルパン頼む。こうしないと認知障害者や失見当識者は何度でもおかわりをするところがあるからだ。ヘルパーも心得たもので、何度もおかわりする者には三分の一程度にして三回に分けて食べさせる。それでも三十分も経たないうちに「ご飯まだですか」と訊く者がいる。私はそういう人たちを密かに観察し、まだ自分が普通の老人であることを確かめている。いつだったか良江が「呆けちゃったら残ったほうが大変だから老人ホームに入ることにはしましよ」と提案したことがあつたが、どうみても良江は呆けそうにない。庭の手入れ

やら夕食の計画やら、気が向いたときだけ結構こまめに動いている。テンションが高いときはあきれほど活発なのだ。ところが鬱の状態になると、萎びたほうれん草のようにしんなりしてしまふ。

この鬱が良江にはプラスにはたらいっているらしく、この間に充電してのだと私は思っている。

やすらぎディサービスに通い始めたのも、リハビリもあるが、それよりも呆け防止のために少々の人間関係の煩わしさには目をつぶって、いろいろな障害者を観察することで自分の病状の進み具合を確認したいという願望があったからだ。それに陶芸教室のほつも佳境にはいつてきているし、家においては体験できないことがここでは楽しむことができる。なにしろ目前に死という大命題をかかえて生きていくのだから。

その陶芸教室もいよいよ窯入れの日を迎えた。

「桑山さんはどうしているのかしら……」

「木村さん、僕も気になって電話してみたんだ。折角、作品ができるんだもの……できれば変わりに焼いた作品を持って帰ってきてもいいと思ってる……でも誰も出なかったよ」

佐々木さんは車窓に目をやった。埴輪のような武甲山が夏空に浮かんでいる。

「あんなに楽しみにしていたのに……」

太田さんがバッグの中から錠剤を取り出すと丁寧に掌にのせた。ヘルパーがベツトボトルを渡す。

私たちは三峰口で下車するといつものとおりの送迎バスに乗り込んだ。

「今日は桑山さんが欠席です。どうも体調をこわしているようなんです」

佐々木さんが名簿を名倉さんに渡す。

「桑山さんは三日ほど前から来ていますよ」

名倉さんはよく冷えた缶入りジュースを皆に配った。

「夏山もいけど蝉がつるさくてね……」

名倉さんはそれつきり黙ってしまつた。

私たちは意外な言葉にしばらくは顔を見合わせるだけだった。

窯入れは一泊二日の日程になっていた。工房では寝泊りできないので私たちは作品を窯に入れるとバスで秩父の町外れの鉾泉宿に泊まつた。桑山さんと厚子さんは宿にはいなかった。

車椅子だから町中のホテルでもとっているんじゃないの」

「そつかもしれませんね、どんなものが出来ているか……楽しみですな」

「桑山さんは織部の縁に」執着だったけどうまく出ますかしら……」

私は佐々木さんと木村さんの話を聞きながら、この宿の名物だという山女魚の田楽に箸をつけた。まるまると太った山女魚の皮をむしると木の芽をあえた甘辛の味噌をつけた。山椒の香りが口で広がりそれがこんがり焼けた山女魚によく合っていた。

太田さんは二の腕のあたりをゴムバンドで止めると血圧計をカバンの中から取り出した。

「あら上がいくぶん高めね。隠れて飲んじゃだめよ」

ヘルパーは笑いながらノートになにか書き込んだ。

鉱泉宿の裏は杉林になっていて時々小枝の折れるような音がした。私は良江に電話を入れてから床に入った。小枝を折るような音はまだ続いていた。

佐々木さんはぎこちない手つきで首のあたりを拭くとバッグから携帯ラジオを取り出した。

「巨人阪神戦でも聴きますか……」

私は首を横に振った。佐々木さんはイヤホンを耳の穴にねじこむと海老のように丸くなった。ひなびた鉱泉宿の静けさの中で私はしばらくまどろんでいた。小枝を折るような音はしばらく続いていた。山稜の黒い起伏が月明かりで意外にくっきりと見える。

「昨日はよく眠れましたか」

原さんが窯に刺しこんだ筒の中からパイロメーター（温度計）を引き抜いた。

「いよいよですな」

窯出しが待ちきれないように佐々木さんや木村さんが焚き口を覗き込む。

「ようやく窯出しですな、どんな作品が出来るか楽しみでしょう……」

名倉さんは秩父の町から同行してきた神主さんに窯入れの時と同じように祝詞を上げさせる。

「それにしてもあの大樽の酒、いくら窯入れとはいえ三つもお供物にすることはないよね」

酒好きの佐々木さんが窯の中を覗んだ。

「もう、跡形も無いよ……佐々木さん」

太田さんが佐々木さんの肩を叩いた。

「皆さん、長い間、苦勞さまでした。これから皆さんの作品を取り出しますの
でしばらく工房で待っていてください」

原さんは大窯の前で一礼すると焚き口の煉瓦をひとつひとつ外し始めた。

私たちは工房に戻ると名倉さんの会社の事務員が用意してくれた赤飯と鯛の潮
汁で昼食をとった。蝉の鳴き声に混じって橋立川の方から鈴を転がしたような河鹿
の鳴き声が聞こえてくる。

「ああして石の上で雌を呼んでいるんです。秋には川から山の中に入っしま
いますけど……」

事務員がお茶を入れながら河鹿や邯鄲の声の素晴らしさを自慢気に話す。私た
ちはしばらく河鹿の声に聞き入った。

原さんが作品をリヤカーに乗せて工房に戻ってきた。

「なかなかの出来栄ですよ。土のこねりとシッピキが難しそうだったんで心
配だったんですが……」

シッピキは轆轤を引き終わった作品を切り離すことで、本当は藁ミコを使うの
だが、私たちは糸を使って壺を轆轤から切り離した。轆轤引きとシッピキには随分
と苦勞したが実際に作品を前にすると、なによりも形が整っていることに皆、歓
声をあげた。

「どうです、あの土塊が皆さんの努力でこんな素晴らしい壺に化ける……楽
しいもんでしょう。陶芸は……」

原さんは壺を机の上に並べる。

「桑山さんが来ているって聞いていましたけど……」

木村さんが桑山さんの絵付けした桜模様の壺を手にとった。

「ええ、桑山さんはいらっしやいますよ……」

原さんはヘアerbバンドを取ると優しい笑顔になった。

工房の前の広場にマイクロバスが着いた。

私はマイクロバスの方を見た。厚子さんの押す車椅子で桑山さんが降車口から

出てくるような気がしたのだ。

原さんは木村さんに会釈するといしばらく間を置いて

「桑山さんは木村さんの持っている壺の中にいらっしやいますよ」

木村さんは怪訝な顔をして壺を見る。

桑山さんは三日前に自宅で亡くなっていた。

「故人の遺言で、面倒な葬儀は嫌だということだったのでご遺族と相談してこの窯でお骨にして、桑山さんの造られた壺に納めたのです。もともとここは昭和の中ごろまで山で遭難した人や巡礼の途中病で倒れた方を茶毘に付してきました。火葬許可もとっていますし、陶芸窯としても使われています。皆さんがご希望ならいつでもご自分の作品の中で眠り続けることができます。大金を使つて冷たい土の中で眠るより、インテリアとして隅でもいい、陽の当たるところで眠りつづけた方がいいでしょう……」

名倉さんは桑山さんの遺骨の入った織部緑の壺を厚子さんに渡す。

「この国には昔から姥捨ての思想がありました。それは今も変わりません。老人は介護されていますが、大抵は施設や特養です。金のある者は瀟洒な介護付きマンションに入っていますけど、みな家族と切り離されています。死にたくても病院はそれも許さず、死ねば花輪を飾り祭壇を設え、金を掛けて死後をかざりたてる。立派な墓に入れる・・・高い金をとって戒名をつける、それはそれでひとつの形なのでしょう。ここでは皆さんの死に支度をお手伝いするために陶芸教室を開いています。あまり儀式にこだわる必要はありません。桑山さんはご自分なりに死に支度をしていたのですね」

昨夜は桑山さんとやはり他の施設で陶芸をしていたという末期の癌患者を窯に入れたという。

「おふたりはまだ意識がありました。家族の介添えで粛々と窯にはいりましたよ。桑山さんは寝台車でお連れいたしました」

名倉さんは遺族に壺を渡した。

中洲に祭壇が組み立てられ壺が安置された。

「もう間もなく宵の月が出ます。皆さんと一緒に御霊をおくりましょう」

名倉さんは「月葬です」と云って微笑った。

月の光がいくつも川面にうかんで流れてゆく。

私は桑山さんの御霊が流れてゆくような気がした。

「お婆ちゃん幸せでしたね……」

厚子さんは私の手を握ると

「みなさんのお陰で最後は楽しみながら逝くことができました」

佐々木さんや太田さんが祭壇の前で合掌している。

私は一瞬、桑山さんの壺の桜が川風に散ったような気がした。

「画やら、気が向いたときだけ結構こまめに動いている。テンションが高いときはあきれほど活発なのだ。ところが鬱の状態になると、萎びたほうれん草のようにしんなりしてしまう。」

「どうやら黒い犬がきたみたい……」

黒い犬というのは鬱のことを指す合図のようなもののだが、この鬱が良江にはプラスにはたらいっているらしく、この間に充電していると私は思っている。

だから良江には呆けはこないのだと私は思っている。

やすらぎデイサービスに通い始めたのも、リハビリもあるが、それよりも呆け防止のために少々の人間関係の煩わしさには目をつぶって、いろいろな障害者を観察することで自分の病状の進み具合を確認したいという願望があったからだ。それに陶芸教室のほうも佳境にはいつてきているし、家においては体験できないことがここでは楽しむことができる。なにしろ目前に死という大命題をかかえて生えているのだから。

その陶芸教室もいよいよ窯入れの日を迎えた。私たちはいつものように秩父に向かった。

「桑山さんはどうしているのかしら……」

「木村さん、僕も気になって電話してみたんだ。折角、作品ができるんだもの……できれば変わりに焼いた作品を持って帰ってきてもいいと思っただけでも誰も出なかつたよ」

佐々木さんは車窓に目をやった。埴輪のような武甲山が夏空に浮かんでいる。

「あんなに楽しみにしていたのに……」

太田さんがバッグの中から錠剤を取り出すと丁寧に掌にのせた。ヘルパーがペットボトルを渡す。

私たちは三峰口で下車するといつものとおりの送迎バスに乗り込んだ。

「今日は桑山さんが欠席です。いつも体調をこわしているようなんです」

佐々木さんが名簿を名倉さんに渡す。

「桑山さんは二日ほど前から来ていますよ」

そう云って、名倉さんはよく冷えた缶入りジュースを皆に配った。

「夏山もいけと蝉がつるさくてね……」

名倉さんはそれっきり黙ってしまった。

私たちは意外な言葉にしばらくは顔を見合わせるた。

「なぜだろう……」

佐々木さんが首をひねる。

「ともかく桑山さんが来ているんだからいいじゃないか……」

私は名倉さんの顔を見詰めた。

窯入れは一泊二日の日程になっていた。工房では寝泊りできないので私たちは作品を窯に入れるとバスで町外れの鉱泉宿に泊まった。桑山さんと厚子さんは宿にはいなかった。

「車椅子だから町中のホテルでもとっているんじゃないの」

「そうかもしれないね、どんなものが出来ているか……楽しみですな」

「桑山さんは織部の緑に」執着だったけどうまく出ますかしら……」

私は佐々木さんと木村さんの話を聞きながら、この宿の名物だという山女魚の田楽に箸をつけた。まるまると太った山女魚の皮をむしると木の芽をあえた甘辛の味噌をつけた。山椒の香りが口で広がりそれがこんがり焼けた山女魚によく合っていた。

介添えの看護師が太田さんの二の腕のあたりをゴムバンドで止めると血圧計をカバンの中から取り出した。

「上がいくぶん高めね。隠れて飲んじゃだめですよ」

看護師は笑いながらノートになにか書き込んだ。

鉱泉宿の裏は杉林になっていて時々小枝の折れる音がした。私は良江に電話を入れてから床に入った。小枝を折るような音はまだ続いていた。

「猪でも来ているのかもしれないな」

佐々木さんはぎこちない手つきで首のあたりを拭くとバッグから携帯ラジオを取り出した。

「巨人阪神戦でも聴きますか……」

私は首を横に振った。佐々木さんはイヤホンを耳の穴にねじこむと海老のように丸くなった。ひなびた鉱泉宿の静けさの中で私はしばらくまどろんでいた。小枝を折るような音はしばらく続いていた。月明かりに秩父の黒い山稜が窓から見えた。

「昨日はよく眠れましたか」

原さんが窯に刺しこんだ筒の中からパイロメーター（温度計）を引き抜いた。

「いよいよですな」

窯出しが待ちきれないように佐々木さんや木村さんが焚き口を覗き込む。

「ようやく窯出しですな、どんな作品が出来るか楽しみでしょう・・・」

名倉さんは秩父の町から同行してきた神主さんに窯入れの時と同じように祝詞を上げさせる。

「昨日窯に入れた大樽の酒、なにも三つも入れることないのに。窯入れとはいえお供物にするのは惜しいですな」

酒好きの佐々木さんが窯の中を覗んだ。

「もつ、跡形も無いよ・・・佐々木さん」

太田さんが佐々木さんの肩を叩いた。

「皆さん、長い間、ご苦労さまでした。これから皆さんの作品を取り出しますのでしばらく工房で待っていてください」

原さんは大窯の前で深々と一礼してから焚き口の煉瓦をひとつひとつ外し始めた。

私たちは工房に戻ると名倉さんの会社の事務員が用意してくれた赤飯と鯛の潮汁で昼食をとった。蝉の鳴き声に混じって橋立川の方から鈴を転がしたような河鹿の鳴き声が聞こえてくる。

「ああして石の上で雌を呼んでいるんです。秋には川から山の中に入ってしまいますけど・・・」

事務員がお茶を入れながら河鹿や邯鄲の声の素晴らしさを自慢気に話す。

私たちはしばらく河鹿の声に聞き入った。

原さんが作品をリヤカーに乗せて工房に戻ってきた。

「なかなかの出来栄ですよ。土のこねりとシッピーキが難しそだったんで心配だったんですが・・・」

シッピーキは引き終わった作品を轆轤から切り離すことで、本当は藁ミゴを使うのだが、私たちは糸を使って壺を轆轤から切り離した。轆轤引きとシッピーキには随分と苦労したが、色合いも絵柄も良く仕上がっている作品を前に私たちは歓声をあげた。

「どうです、あの土塊が皆さんの努力でこんな素晴らしい壺に化ける・・・楽しいもんでしょう。陶芸は・・・」

原さんは壺を机の上に並べる。

「桑山さんが来ているって聞いていましたけど・・・」

木村さんが桑山さんの壺を手にとった。

「ええ、桑山さんはいらっしやいますよ・・・」

原さんはへアーバンドを取ると優しい笑顔になった。

マイクロバスが工房前の広場に着いた。

私はマイクロバスの方を見た。厚子さんの押す車椅子で桑山さんが降車口から

出てくるような気がしたのだ。

原さんは木村さんに会釈するとしばらく間を置いて

「桑山さんは木村さんの持っている壺の中にいらっしやいますよ」

木村さんは怪訝な顔をして壺を見る。

桑山さんは二日前に自宅で亡くなった。

「故人の遺言で、面倒な葬儀は嫌だということでしたのでご遺族と相談してこの窯でお骨にして、桑山さんの造られた壺に納めたのです。もともとここは昭和の中ごろまで山で遭難した人や巡礼の途中病で倒れた方を茶毘に付してきました。火葬許可もとっていますし、陶芸窯としても使われています。皆さんがご希望ならいつでもご自分の作品の中で眠り続けることができます。大金を使って冷たい土の中で寂しく眠るより、インテリアとして隅でもいい、陽の当たるところで眠りつづけた方がいいでしょう・・・」

名倉さんは陶芸を葬儀と結びつけたのだと云って微笑った。

「この国には昔から姥捨ての思想があって、今でもそれは変わりません。年輩いた者は家庭から体よく追いやられ施設で終局の人生を送る一見養護しているようにみえますが、実は冷たいシステムになっているのです。桑山さんのような幸せな境遇にある人でさえ、生きる事が負担になっている世の中なんです。死んだあとも花輪を飾り祭壇を設え、金を掛けて死後をかざりたてる。戒名に高い金を払って立派な墓に入れる・・・それはそれでひとつの形なのでしょうけど、あまり儀式にこだわる必要はありません。おかしな話ですだと思いませんか・・・昨日も本人の希望で二人の方が窯に入りました。癌の末期ということ意識はありませんでしたが家族の方が窯の中に入れたのです」

名倉さんは事務所から酒と蒟蒻の白和えを取り寄せた。

「もつすぐ山間から宵の月が出ます。中洲に祭壇を用意いたしましたので、清めの酒でも飲みながら故人の霊を送りましょう」

原さんが壺に合掌する。

私も桜模様の洒落た壺に手を合わせた。他の遺族たちも川原の中洲にシートを敷き正座する。

川のせせらぎに月の光がいくつも浮かんで流れてゆく。

「月葬だわね、私もこんなふうに送ってもらおうかしら……」
木村さんがぼつりと呟いた。

月葬……こんな死に方もいいかもしれないな

私は胸の奥のほうからこみ上げてくるものを押さえきれず顔を上げた。
谷風に草や木がざわりと泣いた。

。

